

博士論文(要約)

論文題目 現代日本における外国文学の受容と機能  
1970年代のアメリカ文学の翻訳に即して

氏名 邵 丹

## 目次

### 序論

- 七〇年代末頃の文学趣味の変革—村上春樹の登場/1
- 七〇年代の発話困難—翻訳を通しての自己発見/5
- 先行研究のまとめ—三つのアプローチとその不足点/13
- 同時代想像力とは何か—二つの事例研究の構想/19

### 第一章 七〇年代の翻訳を検討するための理論的枠組み

- エヴェン=ゾハルと多元システム理論/27
- トゥーリーと記述的翻訳研究/31

### 第二章 七〇年代の翻訳が置かれた歴史的な文脈

- Youngsters come into being—日本の戦後社会史上における「若者」の登場/39
  - 理想の時代—「太陽族」と呼ばれる戦後派青年像/39
  - 夢の時代—若者の誕生に伴う「反乱」という形での激痛/42
  - 虚構の時代—文化の再編成とサブカルチャーの細分化/46
- 七〇年代の大きなパラダイムシフト—近代読者から現代読者への転移/52
  - 近代読者の歩み—先行する読者論/53
  - 現代読者の肖像—「新大衆」という消費者層の台頭/58
  - 文学全集と雑誌からみる読者層の二重構造/61

### 第三章 ケース・スタディ I : ひとりの訳者、複数の作者—藤本和子の翻訳

- 「エクソフォニー」の系譜に連なる翻訳家—「サブカルチャー」的な生き方/72
  - 六〇年代の小劇場運動における藤本和子の<sup>アンダー・ジェマン</sup>参加/75
    - 演劇中毒—ふたりの演劇仲間/75
    - 運動としての演劇—*Concerned Theatre Japan*の編集作業/78
    - 地下という流れに惹かれて—対抗的姿勢/83
    - 立ち上がるマイノリティ、女性たち—黒人女性の「声」の復元/86
    - 差別問題のパラダイム転換のために—「報告」の力/88
    - 聞書という言文—一致体—もうひとつの地下の流れ/93
  - 新たなる沈黙に「声」を—『死ぬことを考えた黒い女たちのために』の翻訳/99
- 強かな反逆、企てられた革新—日本におけるブローティガン文学の翻訳受容/106
  - 七〇年代を代弁する小説家—作品群における「パロディ」の活用/107
  - ブローティガンのサンフランシスコ時代—対抗文化との関わり/111
  - The Tokyo-Montana Express—時代の文脈<sup>コンテクスト</sup>からの考察/117

小説群が受容された経緯/118  
『アメリカの鱒釣り』における「新しい形」の正体/120  
『アメリカの鱒釣り』の日本語訳—<sup>カタチ</sup>文体の側面からの考察/127  
ブローティガンの文体的特徴/127  
『アメリカの鱒釣り』における「新しい翻訳」の正体/130

#### 第四章 ケース・スタディⅡ：ひとりの作者、複数の訳者 —日本語で構築されたカート・ヴォネガットの世界

新しい小説の書き手のカート・ヴォネガット/147  
強い肉声の響きを持つ作品群—ヴォネガットの語り口調/147  
アメリカ小説の崩壊—ニュー・ジャーナリストたちの奪権/161  
Welcome to the Monkey House—日本におけるヴォネガット文学の受容/169  
六〇年代の黎明期—SFファンダム、共同体の形成/170  
七〇年代の転換期—打ち寄せる<sup>ニューウェーブ</sup>「新しい波」、薄れゆく境界線/177  
八〇年代以降の発展期—SFが豊かな文芸ジャンルへ/187  
複数の翻訳家によるカート・ヴォネガット世界の構築/192  
伊藤典夫と『屠殺場5号』(一九七三年)、『スローターハウス5』(一九七八年)/194  
池澤夏樹と『母なる夜』(一九七三年)/198  
浅倉久志と『スラップスティック』(一九七九年)/203  
飛田茂雄と『ヴォネガット—大いに語る』(一九八四年)/205  
Translator as a Hero—ヴォネガット受容の中心的な役割を担うSFの翻訳/209  
翻訳—辺倒時代の《SFマガジン》—SF専門翻訳者の第一世代/210  
「SFの鬼」福島正実の文学路線—SFの定義をめぐる論争/217  
七〇年代における知的労働の集団化—SF界の翻訳勉強会の発足/224

#### 結論

「若さ」に基づく文化的第三領域の生成—二つのケース・スタディが示すもの/233  
ポリティカル・コレクトネスへ向かうカウンターカルチャー/234  
文学的な地位向上を経験するSF/236  
七〇年代の翻訳文化—ブローティガンおよびヴォネガットとの共振/238  
展望—文化的秩序の「<sup>デコンストラクション</sup>脱構築」のあとに/242

#### インタビュー一覧表

#### 文献目録

## 本文

本論文は5年以内に出版予定です。

そして、著作者が死亡しているため許諾が得られません。その著作名、著作者、及び該当する箇所は以下になります。

Gideon Toury, *Descriptive Translation Studies and Beyond*, Amsterdam:  
John Benjamins Publishing, 1995.

本文第32頁にある「図1 トゥーリーが描いた翻訳学の全体図」という箇所です。

## 文献目録

### 日本語文献

#### ケース・スタディ I : 藤本和子

#### 著作・評論

藤本和子、「シケモクを求めて 夢の果てまで—ブローティガンの太平洋」、『海』1975年9月号、中央公論社。

- 『塩を食う女たち—聞書・北米の黒人女性』、晶文社、1982年。
- 「まるのままへの渇き・そして欠落の意識化」、森崎和江、『森崎和江詩集』、土曜美術社、1984年。
- 『ブルースだったただの唄—黒人女性のマニフェスト』、朝日新聞社、1986年。
- 『どこにいても、誰といっても—異なる者たちとの共生』、筑摩書房、1996年。
- 『リチャード・ブローティガン』、新潮社、2002年。
- 「リチャード・ブローティガンをそろそろ読み返す時期にきている」、『オブラ』2002年9月号、講談社。
- 柴田元幸、「特集 サンフランシスコ・クロニクル」、『Coyote』2008年29号、スイッチパブリッシング。

#### 翻訳

エリーズ・サザランド、『獅子よ藁を食め』、朝日新聞社、1981年。

ストザケ・シャンゲ、『死ぬことを考えた黒い女たちのために』、朝日新聞社、1982年。

マキシーン・ホン・キングストン、『チャイナタウンの女武者』、晶文社、1978年。

- 『アメリカの中国人』、晶文社、1983年。
- 『チャイナ・メン』、新潮社、2016年。

リチャード・ブローティガン、『アメリカの鱒釣り』、晶文社、1975年。

- 『西瓜糖の日々』、河出書房新社、1975年。
- 『ホークライン家の怪物—ゴシック・ウエスタン』、晶文社、1975年。
- 『ビッグ・サーの南軍将軍』、河出書房新社、1976年。
- 『芝生の復讐』、晶文社、1976年。
- 『ソンプレロ落下す—ある日本小説』、晶文社、1976年。
- 『鳥の神殿—官能ミステリー小説』、晶文社、1978年。
- 『バビロンを夢見て—私立探偵小説 1942年』、新潮社、1978年。
- 『東京モンタナ急行』、晶文社、1982年。
- 『西瓜糖の日々』(河出世界文学全集 25 現代の文学)、河出書房新社、1989年。
- 『不運の女』、新潮社、2005年。
- 『エドナ・ウェブスターへの贈り物』、集英社、2010年。
- 「サン・フランシスコ YMCA 讃歌」、池澤夏樹編、『短編コレクション I』(世界文学全集、

第3集)、河出書房新社、2010年。

## ほかの訳者によるブローティガンの翻訳

リチャード・ブローティガン、青木日出夫訳、『愛のゆくえ』、新潮文庫、1975年。

- 水橋晋訳、『リチャードブローティガン詩集』、自家版、1982年。  
『ピル対スプリングヒル鉱山事故』、沖積舎、1988年。
- 池澤夏樹訳、『チャイナタウンからの葉書』、サンリオ株式会社、1990年。
- 高橋源一郎訳、『ロンメル進軍』、思潮社、1991年。
- 中上哲夫訳、『突然訪れた天使の日』、思潮社、1991年。
- 福間健二訳、『東京日記』、思潮社、1992年。

## ケース・スタディⅡ：カート・ヴォネガット

### 長編小説・エッセイ集

カート・ヴォネガット、伊藤典夫訳、『猫のゆりかご』、早川書房、1968年。

- 浅倉久志訳、『タイタンの妖女』、早川書房、1972年。
- 伊藤典夫訳、『屠殺場5号』、早川書房、1973年。
- 池澤夏樹訳、『母なる夜』、白水社、1973年。
- 浅倉久志訳、『プレイヤー・ピアノ』、早川書房、1975年。
- 浅倉久志訳、『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』、早川書房、1977年。
- 伊藤典夫訳、『スローターハウス5』、早川書房、1978年。
- 浅倉久志訳、『スラップスティック』、早川書房、1979年。
- 浅倉久志訳、『ジェイルバード』、早川書房、1981年。
- 浅倉久志訳、『チャンピオンたちの朝食』、早川書房、1984年。
- 浅倉久志訳、『デッドアイディック』、早川書房、1984年。
- 飛田茂雄訳、『パームサンデー—自伝的コラージュ—』、早川書房、1984年。
- 飛田茂雄訳、『ヴォネガット—大いに語る—』、サンリオ株式会社、1984年。
- 浅倉久志訳、『ガラパゴスの箱舟』、早川書房、1986年。
- 飛田茂雄訳、『母なる夜』、早川書房、1987年。
- 浅倉久志訳、『青ひげ』、早川書房、1989年。
- 浅倉久志訳、『ホーカス・ポーカス』、早川書房、1992年。
- 浅倉久志訳、『死よりも悪い運命』、早川書房、1993年。
- 浅倉久志訳、『タイムクエイク』、早川書房、1998年。
- 金原瑞人訳、『国のない男』、NHK出版、2007年。
- 浅倉久志訳、『追憶のハルマゲドン』、早川書房、2008年。

## 短編集

カート・ヴォネガット、伊藤典夫・浅倉久志訳・他訳、『モンキー・ハウスへようこそ』、早川書房、1983年。

— 伊藤典夫・浅倉久志訳、『バゴンボの嗅ぎタバコ入れ』、早川書房、2007年。

— 大森望訳、『はい、チーズ』、河出書房新社、2014年。

— 大森望訳、『人みな眠りて』、河出書房新社、2017年。

— 大森望監修・伊藤典夫・浅倉久志・他訳、『カート・ヴォネガット全短編 1~4』、早川書房、2018~2019年。

## 戯曲・絵本・講演集

カート・ヴォネガット、浅倉久志訳、『さよならハッピー・バースデー』、晶文社、1986年。

— 浅倉久志訳、『お日さま お月さま お星さま』、国書刊行会、2009年。

— 円城塔訳、『これで駄目なら—若い君たちへ』、飛鳥新社、2016年。

## ほかの日本語文献

アーノルド・ウェスカー、木村光一訳、『ウェスカー三部作』、晶文社、1964年。

青山南、「リンゴとオレンジはどう違うか」、『朝日ジャーナル』1984年5月25日、朝日新聞社。

荒正人、「けわしい科学小説の前途」、「朝日新聞」1961年8月22日、朝日新聞社。

— 「科学小説の今後」、読売新聞 1963年11月8日、読売新聞社。

— 「お山の大将はつつしめ」、「読売新聞」1963年11月27日、読売新聞社

— 『宇宙文明論』、三一書房、1984年。

新井直之、『メディアの昭和史』、岩波書店、1989年。

浅倉久志、『猫のゆりかご』(書評)、《SF マガジン》1979年10月号、早川書房。

— 『ぼくがカンガルーに出会ったところ』、国書刊行会、2006年。

— 小山太一、「翻訳者対談・ウッドハウスとヴォネガットの魅力」、『本の話』2007年8月号、文藝春秋社。

麻生享志、『ポストモダンとアメリカ文化—文化の翻訳に向けて』、彩流社、2011年。

荒巻義雄、「山野浩一の世界」、『S・F ファンジン』2018年第62号、全日本中高年SFターミナル。

伊藤典夫、「function SF 4. OLIVER」、「宇宙塵」1962年7月号、「宇宙塵」編集委員会。

— 「SF スキャナー」、《SF マガジン》1965年2月号、早川書房。

— 「痛恨の一冊」、《ミステリマガジン》1996年11月号、早川書房。

— 編、『SF ベスト 201』、新書館、2005年。

石川喬司、「推理小説・SF 界 1963」、『文芸年鑑』1964年、新潮社。

池澤夏樹、「ビート・ジェネレーション以降の新たな感性—リチャード・ブローティガン」、『ニューミュージック・マガジン臨増』1979年3月25日、ミュージック・マガジン社。

— 「SFを読物から文学へ成熟させたカリスマ—カート・ヴォネガット.Jr.」、『ニューミュージック・マガジン臨増』1979年3月25日号、ミュージック・マガジン社。

— 「第三次大戦なんか地獄へ失せろ」、第47回国際ペン大会東京大会報告、日本ペンクラブ、1985年。

岩下誠徳、『プロの英語入門—第一線の9人が明かす修行法』、学陽書房、1980年。

今村楯夫、「誰がかまうものか—核時代でも僕は書く」、『知識』、1984年10月号。

井上ひさし、「人間は優しくなれる 武器はペンしかない」、朝日新聞 1984年5月15日、朝日新聞社。

色川大吉、『昭和史世相篇』、小学館、1990年。  
 板垣新平、『翻訳学』、信山社出版、1995年。  
 岩崎稔・上野千鶴子他編、『戦後日本スタディーズ2』、紀伊國屋書店、2009年。  
 井上健、『文豪の翻訳力—近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』、武田ランダムハウスジャパン、2011年。  
 一編、『翻訳文学の視界—近現代日本文化の変容と翻訳』、思文閣、2012年。  
 石牟礼道子、『新装版 苦海浄土—わが水俣病』、講談社、2004年。  
 一『苦海浄土』(世界文学全集3-04)、河出書房新社、2011年。  
 一『最後の人—詩人 高群逸枝』、藤原書店、2012年。  
 石井里枝・橋口勝利編、『日本経済史』、ミネルヴァ書房、2017年。  
 ヴァルター・ベンヤミン、高原広平・野村修編、『ヴァルター・ベンヤミン著作集 1 暴力批判論』、晶文社、1969年。  
 W・ベック・A・ギデンズ・S・ラッシュ、松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳、『再帰的近代化—近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』、而立書房、1997年。  
 上野千鶴子、『不惑のフェミニズム』、岩波書店、2011年。  
 一『〈おんな〉の思想 私たちは、あなたを忘れない』、集英社インターナショナル、2013年。  
 宇野常寛、『若い読者のためのサブカルチャー論』、朝日新聞社、2018年。  
 江藤淳、『三島由紀夫の『美しい星』 世界の破滅を描く』、『朝日新聞』1962年11月3日、朝日新聞社。  
 一『閉された言語空間—占領軍の検閲と戦後日本』、文藝春秋、1994年。  
 エステル・フリードマン、安川悦子・西山恵美訳、『フェミニズムの歴史と女性の未来—後戻りさせない』、明石書店、2005年。  
 太田三郎、『翻訳文学』、岩波書店、1959年。  
 尾崎秀樹・宗武朝子、『雑誌の時代—その興亡のドラマ』、主婦の友社、1979年。  
 大宅壮一、『文学的戦術論』、蒼洋社、1981年。  
 大野晋・丸谷オー編、『国語改革を批判する』、中央公論社、1983年。  
 大江健三郎、『テクノロジー—文明と『無垢』の精神』、『新潮』1984年7月号、新潮社。  
 大澤真幸、『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争』、筑摩書房、1996年。  
 大塚英志、『サブカルチャー文学論』、朝日新聞社、2004年。  
 大森望、『特盛！SF 翻訳講座—翻訳のウラ技、業界のウラ話』、研究社、2006年。  
 一 牧眞司編、『サンリオ SF 文庫総解説』、本の雑誌社、2014年。  
 一『現代SF 観光局』、河出書房新社、2016年。  
 小田光雄、『出版社と書店はいかにして消えていくか—近代出版流通システムの終焉』、論創社、2008年。  
 岡室美奈子・梅山いつき編、『六〇年代演劇再考』、水声社、2012年。  
 金坂健二、『惑溺へのいざない—キャンプとヒッピー・サブカルチャー』、『美術手帖』1968年2月号、美術出版社。  
 川本三郎、『同時代を生きる「気分」』、冬樹社、1977年。  
 一『都市の感受性』、筑摩書房、1984年。  
 柄谷行人、『終焉をめぐる』、講談社、1995年。  
 一『近代文学の終り—柄谷行人の現在』、インスクリプト、2005年。  
 笠井潔編、『SF とは何か』、日本放送出版協会、1986年。  
 菅孝行、『戦後演劇—新劇は乗り越えられたか』、社会評論社、2003年。  
 加藤典洋、『翻訳文学に培われた新しい感性』、『ニューリーダー』2006年1月号、はあと出版。  
 一『戦後入門』、筑摩書房、2015年。  
 木島始、『詩・黒人・ジャズ』、晶文社、1965年。  
 木下順二、『戯曲の日本語』、中央公論社、1982年。  
 木本至、『雑誌で読む戦後史』、新潮社、1985年。  
 木村勝美、『新宿歌舞伎町物語』、潮出版社、1986年。  
 木内徹編、『黒人文学書誌』、鷹書房弓プレス、1994年。  
 北田暁大・水溜真由美・野上元編、『カルチュラル・ポリティクス—1960/70』、せりか書房、2005年。  
 栗原裕一郎、『〈盗作〉の文学史—市場・メディア・著作権』、新曜社、2008年。



黒川典是・成相肇編、図録『パロディ、二重の声—日本の一九七〇年代前後左右』、東京ステーションギャラリー、2017年。

くぼたのぞみ、「訳者あとがきってノイズ?」、『図書』2018年5月号、岩波書店。

小汀良久、『出版戦争—大量安価で出版の質は保てるか』、東京経済、1977年。

小松右京他、『SFへの遺言』、光文社、1997年。  
—『SF魂』、新潮社、2006年。

小熊英二、『〈民主〉と〈愛国〉—戦後日本のナショナリズムと公共性』、新曜社、2002年。  
—『1968〈上〉—若者たちの叛乱とその背景』、新曜社、2009年。

小林信彦、「イーストウッド—初めてのスポーツ映画」、『週刊文春』2010年3月4日号、文藝春秋社。

佐々木基一、「軽くて軽薄ならず」、『群像』1979年6月号、講談社。

佐多稲子、「選評」、『群像』1979年6月号、講談社。

佐久間文子、「時代を超え続く『衝撃』」、「朝日新聞」2005年10月5日、朝日新聞社。

佐々木マキ、『うみべのまち—佐々木マキのマンガ1967-81』、太田出版、2011年。

斎藤兆史、「訳読のすすめ—日本語の生態系を守るために」、『日本語学』2016年1月号、明治書院。

ジュディス・メル、浅倉久志訳、『SFに何ができるか』、晶文社、1972年。

庄司薫、『バクの飼主めざして』、講談社、1973年。

島尾敏雄、「読後感」、『群像』1979年6月号、講談社。

島田雅彦、「人間が持つ残酷さへの見事な批評」、『朝日ジャーナル』1984年10月5日号、朝日新聞社。

鹿野政直、『婦人・女性・おんな—女性史の問い』、岩波書店、1989年。

ジェレミー・マンディ、鳥飼玖美子監訳、『翻訳学入門』、みすず書房、2009年。

柴田元幸、「鑑か鏡か—アメリカ文学は日本でどう読まれてきたか」、『すばる』2009年8月号、集英社。  
—「豆腐で自殺する方法—翻訳について」、『すばる』2009年9月号、集英社。  
—「『仰ぎ見る』翻訳・『対等』な翻訳」、『れにくさ』2011年第3号、現代文芸論研究室。

塩澤実信、『戦後出版史—昭和の雑誌・作家・編集者』、論創社、2010年。

ジェイ・ルービン、『村上春樹と私—日本の文学と文化に心を奪われた理由』、東洋経済新報社、2016年。

水牛くらぶ・平野公子・八巻美恵編、『モノ誕生「いまの生活」』、晶文社、1990年。

スコット・フィッツジェラルド、村上春樹訳、『グレート・ギャツビー』、中央公論新社、2006年。

鈴木直、『輸入学問の功罪—この翻訳わかりますか』、筑摩書房、2007年。

鈴木紀子、「冷戦期の『文学大使』たち—戦後日米のナショナル・アイデンティティ形成における米文学の機能と文化的受容」、『人間生活文化研究』2013年23号、大妻女子大学。

諏訪部浩一他編、『アメリカ文学入門』、三修社、2013年。

セイヴァリー、別宮貞徳訳、『翻訳入門—その理念と技法』、八潮出版社、1971年。

ゾラ・ニール・ハーストン、松本昇訳、『彼らの目は神を見ていた』、新宿書房、1995年。

谷沢永一、『近代日本文学史の構想』、晶文社、1964年。

ダルコ・スーヴイン、大橋洋一訳、『SFの変容—ある文学ジャンルの詩学と歴史』、1991年。

玉木明、『言語としてのニュー・ジャーナリズム』、学藝書林、1992年。

多和田葉子、『エクソフォニー—母語の外へ出る旅』、岩波書店、2003年。

高平哲郎、『ぼくたちの七〇年代』、晶文社、2003年。

巽孝之、『日本変流文学』、新潮社、1998年。  
—編、『日本SF論争史』、勁草書房、2000年。  
—監修・伊藤優子編、『カート・ヴォネガット』、彩流社、2012年。  
—監修・日本SF作家クラブ編、『国際SFシンポジウム全記録』、彩流社、2015年。

竹内洋、『学歴貴族の栄光と挫折』、講談社、2011年。

高橋良平編、『伊藤典夫翻訳 SF 傑作選—ボロゴーフはミムジイ』、早川書房、2016年。

田坂憲二、『日本文学全集の時代—戦後出版文化史を読む』、慶應義塾大学出版社、2018年。

チャールズ・J・シールズ、金原瑞人・桑原洋子訳、『人生なんて、そんなものさ—カート・ヴォネガットの生涯』、柏書房、2013年。

坪内祐三、『一九七二—「はじまりのおわり」と「おわりのはじまり」』、文藝春秋、2003年。

津野海太郎、『おかしな時代—『ワンダーランド』と黒テントへの日々』、本の雑誌社、2008年。

—『したくないことはしない—植草甚一の青春』、新潮社、2009年。

土屋由香、『親米日本の構築—アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』、明石書店、2009年。

デイヴィッド・グッドマン、『逃亡師—私自身の歴史大サーカス』、晶文社、1976年。

寺西重郎、『歴史としての大衆消費社会—高度成長期とは何だったのか？』、慶應義塾大学出版会、2017年。

常盤新平、『楽しい暗喩に富む—風変わりな図書館の恋』、『読売新聞』1975年5月19日、読売新聞社。

—『翻訳出版—編集後記』、幻戯書房、2016年。

トム・ウルフ、常盤新平訳、『小説を甦られるもの』、『海』1974年12月号、中央公論新社。

—青山南訳、『そしてみんな軽くなった—トム・ウルフの1970年代革命講座』、大和書房、1985年。

飛田茂雄、『翻訳の技法—英文翻訳を志すあなたに』、研究社、1997年。

都甲幸治、『偽アメリカ文学の誕生』、水声社、2009年。

ナット・ヘントフ、木島始訳、『ジャズ・カントリー』、晶文社、1966年。

中島梓、『文学の輪郭』、講談社、1978年。

—『ベストセラーの構造』、講談社、1987年。

長田弘、『大きな顔—小野二郎の人と仕事』、晶文社、1983年。

永嶺重敏、『雑誌と読者の近代』、日本エディタースクール出版部、1997年。

中村政則編、『戦後改革とその遺産』、岩波書店、2005年。

難波功士、『サブカルチャー概念の現状をめぐって』、『関西学院大学社会学部紀要』2006年101号、関西学院大学社会学部。

中村桃子、『〈性〉と日本語—ことばがつくる女と男』、NHK ブックス、2007年。

長山靖生、『戦後 SF 事件史』、河出書房新社、2012年。

—『日本 SF 精神史—完全版』、河出書房新社、2018年。

西堂行人、『[証言] 日本のアングラ—演劇革命の旗手たち』、作品社、2015年。

ノースロップ・フライ、中村健二・真野泰訳、『世俗の聖典—ロマンスの構造』、法政大学出版局、1999年。

橋本福夫、『英米文学論』、早川書房、1989年。

原卓也編、『翻訳百年—外国文学と日本の近代』、大修館書店、2000年。

ハンス・ロベルト・ヤウス、響田収訳、『挑発としての文学史』、岩波書店、2001年。

パスカル・カザノヴァ、岩切正一郎訳、『世界文学空間—文学資本と文学革命』、藤原書店、2002年。

ピエール・ブルデュー、石井洋二郎訳、『ディスタクシオン I』、新評論、1989年。

東浩紀、『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』、講談社、2001年。

平石貴樹、『アメリカ文学史』、松柏社、2010年。

—編訳、『アメリカ短編ベスト 10』、松柏社、2016年。

福田恆存、『国語問題論争史』、新潮社、1962年。

フリッツ・K・リンガー、『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』、名古屋大学出版会、1991年。

古野ゆり、『日本の翻訳—変化の表れた1970年代』、『通訳研究(2)』2002年、日本通訳学会。

福島正実、『SFの領域は広い』、『読売新聞』1963年11月23日、読売新聞社。

—『未踏の時代—日本 SF を築いた男の回想録』、早川書房、2009年。

丸谷才一、『時間旅行者の滑稽で自在な旅』、『週刊朝日』1973年4月27日、朝日新聞社。

- 「ユーモアとパロディで綴る 47 章」、『週刊朝日』1975 年 4 月 18 日、朝日新聞社。
- 「新しいアメリカ小説の影響」、『群像』1979 年 6 月号、講談社。
- 「『デッドアイ・ディック』」、『週刊朝日』1984 年 9 月 21 日、朝日新聞社。
- 「機智に富んだ話術、しゃれのめした語り口 『デッドアイディック』」、『週刊朝日』1984 年 9 月 21 日号、朝日新聞社。
- 『完本 日本語のために』、新潮社、2011 年。
- 松原純子、「『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』心やさしさ、軽妙な筆」、「読売新聞」1977 年 6 月 20 日、読売新聞社。
- 丸山真男・加藤周一、『翻訳と日本の近代』、岩波書店、1998 年。
- 前田愛、『近代読者の成立』、岩波書店、2001 年。
- 宮本陽吉、「痛烈な物質文明諷刺」、「読売新聞」1973 年 8 月 7 日、読売新聞社。
- 「カート・ヴォネガット」、『青春と読書』1976 年 6 月号、集英社。
- 三田格編、『吾が魂のイロニー—カート・ヴォネガット Jr.の研究読本』、北宋社、1984 年。
- 溝口明代他編、『資料 日本ウーマン・リブ史 I』、松香堂書店、1992 年。
- 見田宗介、『現代日本の感覚と思想』、講談社、1995 年。
- 三浦雅士、『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』、新書館、2003 年。
- 宮田昇、『新編 戦後翻訳風雲録』、みすず書房、2007 年。
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子、『増補 サブカルチャー神話解体—少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』、筑摩書房、2007 年。
- 三ッ木道夫、『翻訳の思想史—近現代ドイツの翻訳論研究』、晃洋書房、2011 年。
- 宮沢章夫、『NHK ニッポン戦後サブカルチャー史』、NHK 出版、2014 年。
- 『東京大学「80 年代地下文化論」講義 決定版』、河出書房新社、2015 年。
- 村上泰亮・公文俊平、『文明としてのイエ社会』、中央公論新社、1979 年。
- 村上春樹、『村上春樹全作品 1979～1989』、講談社、1990 年。
- 「特集 村上春樹ロングインタビュー」、『考える人』2010 年夏号、新潮社。
- 『若い読者のための短編小説案内』、文藝春秋、1997 年。
- 『「そうだ、村上さんに聞いてみよう」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける 282 の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』、朝日新聞社、2000 年。
- 佐々木マキ・大橋歩・和田誠・安西水丸・ちひろ美術館監修、『村上春樹とイラストレーター』、ナナロク社、2016 年。
- 柴田元幸、『翻訳夜話』、文藝春秋、2000 年。
- 柴田元幸、『翻訳夜話 2 サリンジャー戦記』、文藝春秋、2003 年。
- 『村上春樹 翻訳(ほとんど)全仕事』、中央公論新社、2017 年。
- 村松友視、『ヤスケンの海』、幻冬舎、2003 年。
- 森崎和江、『まっくら—女坑夫からの聞き書き』、理論社、1961 年。
- 『さわやかな欠如』、国文社、1964 年。
- 『第三の性—はるかなるエロス』、三一新書、1965 年。
- 「同質性のなかの異族の発見」、『新日本文学』1970 年 9 月号、新日本文学会。

- 『からゆきさん』、朝日新聞社、1976年。
- 「2つの占領一屈折の精神史」、『思想の科学』1990年7月号、思想の科学社。
- 森下一仁、「カート・ヴォネガットは語る」、《SFマガジン》1984年8月号、早川書房。
- 森下達、『怪獣から読む戦後ポピュラー・カルチャー—特撮映画・SFジャンル形成史』、青弓社、2016年。
- 山崎朋子、『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』、筑摩書房、1972年。
- 山野浩一、「“特殊小説”を飛び出すSF」、「読売新聞」1972年9月21日、読売新聞社。
- 「四次元世界のアンチ・ロマン」、「読売新聞」1973年3月12日、読売新聞社。
- 柳父章、『比較日本語論』、日本翻訳家養成センター、1979年。
- 『翻訳語を読む—異文化コミュニケーションの明暗』、丸山学芸図書、1998年。
- 水野的・長沼美香子編、『日本の翻訳論：アンソロジーと解題』、法政大学出版局、2010年。
- 矢野徹、『SFの翻訳』、奇想天外社、1981年。
- 矢口進也、『世界文学全集』、トパーズプレス株式会社、1997年。
- ユージン・ナイダ、成瀬武史訳、『翻訳学序説』、開文社、1972年。
- 吉本隆明、『言語にとって美とはなにか』、勁草書房、1965年。
- 吉行淳之介、「一つの収穫」、『群像』1979年6月号、講談社。
- 吉見俊哉、『都市のドラマトウルギー—東京・盛り場の社会史』、弘文堂、1987年。
- 『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』、岩波書店、2007年。
- ロバート・スコールズ・エリック・ラブキン、伊藤典夫・浅倉久志・山高昭訳、『SF その歴史とヴィジョン』、TBSブリタニカ、1980年。
- ロラン・バルト、宗左近訳、『表徴の帝国』、筑摩書房、1996年。
- 李鐘元、『東アジア冷戦と韓米日関係』、東京大学出版会、1996年。
- 若島正、「ヴォネガットとSF」、《SFマガジン》2007年9月号、早川書房。
- 渡辺利雄、『講義 アメリカ文学史 補遺版』、研究社、2009年。
- 和田誠、『定本 時間旅行』、玄光社、2018年。

## Works Cited

- Akashi, Motoko, *Translator Celebrity: Investigating Haruki Murakami's Visibility as a Translator*, *Celebrity Studies*, Routledge: Taylor & Francis Group, 2018.
- Allen, Donald Merriam eds, *The New American Poetry, 1945-1960*, New York: Grove Press, 1960.
- Barber, John F eds, *Richard Brautigan: Essays on the Writings and Life*, McFarland, 2006.
- Barth, John, *The Literature of Exhaustion*, *The Atlantic Monthly*, August 1967.
- Bercovitch, Sacvan, and Cyrus R. K. Patell eds, *The Cambridge History of American Literature: Volume 7, Prose Writing, 1940-1990*, Cambridge University Press, 1994.
- Brautigan, Richard, *The Abortion: An Historical Romance 1966*, New York: Simon and Schuster, 1971.
- *Trout Fishing in America*, New York: Mariner Books, 2010.
- Chénétier, Marc, *Richard Brautigan*, London: Methuen, 1983.
- Clayton, John, Richard Brautigan: The Politics of Woodstock, *New American Review*, Number 11, 1971.

- Cook, Bruce, *The Beat Generation*, New York: Charles Scribner's Sons, 1971.
- Elliott, Emory, Martha Banta, and Houston A. Baker eds, *Columbia Literary History of the United States*, Columbia University Press, 1988.
- Even-Zohar, Itamar, The Position of Translated Literature within the Literary Polysystem, *Poetics Today* 11/1, 1990.
- Fallon, Michael, A New Paradise for Beatniks, *San Francisco Examiner*, September 5, 1965.
- Fujimoto, Kazuko, Discrimination and the Perception of Difference, *Concerned Theatre Japan*, Volume Tow Number Three, Spring, 1973.
- George, Pendel, Book Cover: Trout Fishing in America, *Financial Times London*, Aug 30, 2010.
- Hackenberry, Charles, Romance and Parody in Brautigan's the Abortion, *Critique: Studies in Contemporary Fiction* 23(2),1981.
- Hermans, Theo, *The Manipulation of Literature: Studies in Literary Translation*, London & Sydney: Croom Helm,1985.
- The Translator's Voice in Translated Narrative, *Target* 8.1, 1996.
  - *Translation in Systems: Descriptive and Systemic Approaches Explained*, Routledge, 1999.
  - eds, *Crosscultural Transgressions :Research Models in Translation Studies II: Historical and Ideological Issues*, St. Jerome, 2002.
- Hjortsberg, William, *Jubilee Hitchhiker: The Life and Times of Richard Brautigan*, Counterpoint, 2012.
- Klein, Marcus eds, *The American Novel since World War II*, New York: Fawcett Publications, 1969.
- Klinkowitz, Jerome eds, *Literary Disruptions: The Making of a Post-Contemporary American Fiction*, University of Illinois Press, 1980.
- Lawrence, Wright, The Life and Death of Richard Brautigan, *Rolling Stone*, April 11,1985.
- Lee, Martin A., and Bruce Shlain, *Acid Dreams: The CIA, LSD, and the Sixties Rebellion*, New York: Grove Press, 1985.
- Lytle, Mark H, *America's Uncivil Wars: The Sixties Era: From Elvis to the Fall of Richard Nixon*, New York: Oxford University Press, 2006.
- Malley, Terence, *Richard Brautigan*. New York: Warner Paperback Library, 1972.
- Meaney, Thomas, How Kurt Vonnegut Created a Novel, a Cult Following and One of the most Loyal Readerships in American Fiction, *Times Literary Supplement (T.L.S)*, Mar 9, 2012.
- Morgan, Bill, *The Beat Generation in San Francisco: A Literary Tour*, San Francisco: City Lights Books, 2003.
- Nadel, Alan, *Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age*. Duke University Press, 1995.
- Reed, Peter, *Writers for the 70s: Kurt Vonnegut, Jr*. New York: Warner Books, 1972.
- Schaub, Thomas H, *American Fiction in the Cold War*, University of Wisconsin Press, 1991.
- Scholes, Robert E, Mitheridates, He Died Old: Black Humor and Kurt Vonnegut. Jr., *The Hollins Critic III*, Oct 1966.
- *The Fabulators*, Oxford University Press, 1967.
- Shange, Ntozake, *For Colored Girls Who Have Considered Suicide/When the Rainbow Is Enuf: A Choreopoem*,

Scribner, 2010.

Smith, Barbara eds, *Home Girls: A Black Feminist Anthology*, New York: Kitchen Table (Women of Color Press), 1983.

Sukenick, Ronald, *The Death of the Novel and Other Stories*, New York: Dial Press, 1969.

Toury, Gideon. *Descriptive Translation Studies and Beyond*, Amsterdam: John Benjamins Pub, 1995.

Troyer, Gene van and Grania Davis eds, *Speculative Japan*, Kurodahan Press, 2007.

Venuti, Lawrence eds, *The Translation Studies Reader*. 3rd edition, Routledge, 2012.

Vonnegut, Kurt, *Wampeters, Foma & Granfalloon*, New York: Delacorte Press, 1974.

— *Mother Night*, Dial Press trade paperback edition, 2006.

— *Slapstick, Or, Lonesome no More*, Dial Press trade paperback edition, 2006.

— Sidney Offit eds, *Novels & Stories, 1963-1973*, Library of America, 2011.

Weissbort, Daniel, and Astradur Eysteinnsson eds, *Translation: Theory and Practice A Historical Reader*, Oxford University Press, 2006.

## 論文の内容の要旨

論文題目:現代日本における外国文学の受容と機能

1970年代のアメリカ文学の翻訳に即して

氏名:邵 丹

本論文は、村上春樹に大きな影響を及ぼしたリチャード・ブローティガンとカート・ヴォネガットの受容史を検討し、この二人の作品群を日本の文学的風土に移植することで七〇年代の翻訳文化自体が大きく変貌したことを論証した。

まず、リチャード・ブローティガンは、多くの意味で小劇場運動という六〇年代の<sup>カウンターカルチャー</sup>対抗文化の延長線上で日本に受容された。発見者の津野海太郎は、早大劇研の時代から小劇場運動にコミットし、ブローティガンを発見した当時、晶文社に勤めるかたわら、劇団黒テントの旅公演に関与していた。『アメリカの鱒釣り』を「新しい翻訳で新しい形で出したい」と願った津野は、素人の可能性に期待をかけてブローティガンの翻訳を演劇仲間の藤本和子に任せた。かつて早大劇研の看板女優だった藤本は、当時、機関誌の責任編集をグッドマンとともに引き受けることで「演劇センター68/69」が掲げた活動計画のうちの出版を担当していた。加えて、出版文化の側面からみれば、独立系の中小規模の出版社に数えられる晶文社自体は、六〇年代に、ある知的風土を築いた一群の出版物を出したために、一種のカウンターカルチャー的な存在だった。つまり、版元や担当編集者(発見者)、ならびに翻訳者(紹介者)の側面から見れば、『アメリカの鱒釣り』(晶文社、一九七五年)は、まさに「演劇」を鍵語とする対抗文化の土壌から育った文化的産物だったのである。

ところで、『アメリカの鱒釣り』の藤本訳は、津野が見込んだとおり、「新しい翻訳」になっただけでなく、柴田元幸が評するように、「翻訳史上の革命的事件」となった。藤本は、ブローティガンの直截的な英語を受け入れ、口語体という日本語の現代文体を創り出した。それに比べて、当時、多くの翻訳者たちは、戦後の国語改革を経て西欧語をモデルとする態度が構文の上でも支配的になったために原文のセンテンスにならって日本語の文を表現しようとしていた。このような状況を踏まえて、「文章が生きている」『アメリカの鱒釣り』の藤本訳は、翻訳文学に新風を吹き込んだのである。さらに、『アメリカの鱒釣り』の翻訳の現場で藤本は、原作に思想や哲学を求めるといった内容重視の流行の(trendy)翻訳規範にかわって、テキストにひそむユーモア、声、リズム、音楽に耳を傾けるといった形式重視の革新的(progressive)翻訳規範を創出した。

なぜ、デビュー当時、素人同然な藤本和子は、七〇年代に、伝統のしがらみを解き放ち、文学翻訳の現場に革新的な規範を導入できたのか。理由は二つある。ひとつは、藤本は、「エクソフォニー」体験の系譜に連なる女性翻訳家のひとりだったからだ。アメリカ人と同じような生活環境の中で

長く暮らした藤本は、アメリカ英語のリズムとテンポを体得していた。加えて、『アメリカの鱒釣り』の翻訳を手がけていたとき、何度もブローティガン本人に話を伺うことができた。つまり、海外渡航が一般化する前に、文学翻訳者にとって原作者が遠い世界に住む想像上の人物であったのに対し、藤本にとって、ブローティガンは、肉声を聞くことのできる等身大の存在だったのである。そして、もうひとつの理由は、小劇場運動へのコミットメントで培われた藤本の反抗的な姿勢にある。六〇年代に、藤本は、既にアンダーグラウンド(地下)演劇と九州のサークル村の女たちによる自己表現運動という二つの「地下」の流れに惹かれていた。他者に開示できないという弱点を抱えるアンブレラ演劇が自らを狭い範囲に限定してしまったのに比べ、演劇の運動を「視野の広さ」と捉えた藤本は、七〇年代の後半に『チャイナタウンの女武者』から始まる一連の先駆的工作を通して、少数民族の女性というアメリカ社会で二重に疎外される他者に熱い眼差しを向けていた。さらに、藤本は、「聞書」という言文一致の表現形式に注目し、『塩を食う女たち—聞書・北米の黒人女性』などの草分け的な仕事を通して黒人女性の「声」の復元につとめた。八〇年代の初頭に、藤本が編集と翻訳の両方を引き受けた「北米黒人女性作家選」の刊行は、七〇年代の半ばから動き始めた翻訳受容における「新しい波」を一挙に押し進めただけでなく、共通経験の強調という八〇年代以降の黒人女性作家の受容の様式をも確立させた。藤本が翻訳家として歩んできた道は、七〇年代以降のカウンターカルチャーがポリティカル・コレクトネス(政治的適正)へ向かうことを体現しているように見える。藤本和子という女性翻訳家の活躍で、従来のアメリカ文学の翻訳にまつわる「白い」や「マッチョ」などのステレオタイプもまた改められたのである。

次に、『プレイヤー・ピアノ』で否応なしに SF のレッテルを貼られたカート・ヴォネガットは、ペーパーバックが生んだ最初の大作家だった。キャリアの最初の二十年間でヴォネガットは、スリック雑誌やペーパーバック市場を作品の発表の場にしていたために、実質的に無名でありつづけた。しかし、文壇から無視されたものの、「通俗的」な発表媒体は、かえってヴォネガットに文体実験を行うほどの創作上の「自由」を与えた。例えば、一九六一年に出た三作目の長編小説『母なる夜』において、ヴォネガットは、一人称という語りの形式や短い句を活かした場面描写、ならびに非常に細かい章の区分けを意識的に作品に取り入れた。『猫のゆりかご』が出た頃には、絶版になった旧作をふくめ、ヴォネガットの作品群は、アメリカの大学生の間で一種のアンダーグラウンド・クラシックとして回覧されるようになった。

特筆すべきことに、ヴォネガットの旧作がアメリカの大学生の間で読み回しされていたのと時を同じくして、東京で伊藤典夫という日本人大学生は、SFに関する鋭い嗅覚をたよって当時、日本では全く無名だったヴォネガットを発見した。伊藤の紹介で福島正実は、一九六二年の時点で早くも解説文付きのヴォネガットの短編翻訳を《SF マガジン》に載せていた。また、同誌のコラム「SF スキャ



ナー」でヴォネガットが正式に取り上げられたことで、一九六五年は、「ヴォネガット宣言の年」となったのである。「SF スキャナー」の紹介文でヴォネガットを「異色 SF 作家」と評した伊藤典夫は、同年の F&SF 誌の時評でヴォネガットの分類が不可能だと主張するジュディス・メルルとともに、ヴォネガットのような作家の活躍によって SF というジャンルが拡大されていくことに気づいていた。

六〇年代という創作上の実験期を経て、ヴォネガットは、集大成となる『スローターハウス 5』において虚構と現実の有機的な結合という独自の語りの形式を発明し、かつ確立した。しかし、自ら認めるように、『スローターハウス 5』以降、創造的狂気が衰えたため、ヴォネガットは、驚きにみちた、美しく底深い人生のイメージを見せる者といよりも、むしろ説明者になっていった。

その一方で、ヴォネガットの発見者である伊藤典夫は、一九六八年に、『猫のゆりかご』を訳す際にヴォネガットの翻訳文体を確立した。七〇年代に入ると、伊藤の発明によるヴォネガットの翻訳文体は、長編小説の専属訳者となった翻訳仲間の浅倉久志によって受け継がれ、安定化していった。忘れてはならないのは、伊藤と浅倉の背後に、六〇年代に形作られた SF ファンダムや SF 界という集団の力があつたことだ。例えば、ジュディス・メルルの提案を機に、伊藤と浅倉が最初の参加者となる SF 界の翻訳勉強会は、七〇年代における知的労働の集団化の象徴の一つとして一九七二年に発足した。ところで、七〇年代に、池澤夏樹が『海』の誌上で発表したヴォネガット論は、当時のヴォネガット文学の批評の最高水準を示すものとなった。しかも、一九七九年に発表された池澤のエッセイには、読物だった SF もまた立派な文学になれるという文学界の視点の転換を認めることができる。しかし、皮肉なことに、日本でヴォネガットが次第に主流文学に受け入れられる一方で、ヴォネガットの存在を日本の読者に知らしめた SF の翻訳は、七〇年代の後半に大空白時代を迎えた。状況の改善を目指して、山野浩一は、一種の「世界文学」的な様相を呈するサンリオ SF 文庫を企画した。その延長線上で、『ヴォネガット—大いに語る』というエッセイ集は、一九八四年に、サンリオ SF 文庫とは双子的な存在だったサンリオ文庫から刊行された。八〇年代以降、ヴォネガットの作品群の受容は、一般大衆を巻き込んでさらなる展開を見せた。とりわけ、一九八四年の本人の初来日を機にブームが発生し、ヴォネガットは、一躍して人気作家となったのである。

総じて言えば、日本でブローティガンとヴォネガットの翻訳受容を支えたのは、戦後のベイビーブーマー世代に属する七〇年代当時の、若い読者をはじめ、若手の翻訳者や編集者などに代表される若いエネルギー、ないし若者文化だった。方向性という観点から見れば、六〇年代のカウンターカルチャーがしだいに周縁へ向かったのに対し、七〇年代、とりわけその後半に勃興したサブカルチャーは、文学や演劇などの上位文化の要素を取り入れて著しい地位向上を経験する。その結果、一種の文化対流現象が生じてしまい、従来の、明瞭な境界線が引かれた文化領域にかわって、七〇年代に新興社会層の若者を土台とする文化的第三領域があらわれたのである。